



追悼の辞(抜粋) 蒲島郁夫県知事

2度にわたる震度7の激震は、ふるさとの姿を一変させ、273人の尊い命を奪い去っていきました。ここ益城町では、災害関連死を含む45人が帰らぬ人となりました。5年の歳月が経過しようとも、胸の痛みを抑えることができません。心よりお悔やみ申し上げます。

地震発生後、初めて益城町の被災現場に入ったのは4月18日でした。町の至るところで建物が倒壊し、道路は寸断され、壊滅的な被害を受けた益城町の姿は今もまぶたに焼き付いて離れません。「益城町の復興なくして熊本地震からの復興はない」という思いが湧き上がってきたことを覚えています。

この5年間私は、「被災者の痛みを最小化すること」、「単に元の姿に戻すのではなく、創造的復興を目指すこと」、「復旧・復興を熊本のさらなる発展につなげること」。この3原則のもと、被災された方々への支援と益城町

の創造的復興に全力で取り組んでまいりました。その結果、96軒の方々が「すまいの再建」を果たされ、新たな一歩を踏み出されています。

また、皆さまのご理解・ご協力のもと、県道熊本高森線4車線化や益城中央被災市街地復興土地区画整理事業による「復興まちづくり」は着実に進み、益城町の将来の輪郭がくつきりと浮かび上がってきました。そして、大学や企業の進出という新しい活力が、町の発展をけん引する原動力になると確信しています。

忘れてならないのが、現在も281人が仮設住宅での生活を余儀なくされていることです。私は、「誰一人取り残さない」との決意で、最後のお一人までしっかりと寄り添ってまいります。

益城町の創造的復興は、昨年7月の豪雨で被災した、球磨川流域の皆さまにも希望と勇気を与え、必ずや復興の道しるべになると 생각합니다。

地震発生から5年、ふるさとの再生に一丸となつて取り組んできた益城町の皆さまの強い絆と努力に、心より敬意を表します。そしてこれからも、皆さまと心一つに創造的復興に全力で取り組み、熊本の発展につなげていくことを固くお誓い申し上げます。

最後に、犠牲となられた皆さまの御霊の平安をお祈り申し上げ、追悼の辞といたします。



追悼の辞(抜粋)

稲田忠則町議会議長

町を襲った震度7の大地震から、5年の歳月が経過しました。気持ち奮い立たせながら、復興への道を歩もうと努力を重ねてまいりました。震災の傷跡はあまりにも深く大きいと、今さらながら感じずにはいられません。

震災から5年、町民の皆さまの笑顔が徐々に戻ってきました。互いの存在を心から大切に思えるようにもなりました。やさしさは強さを生みます。

町議会としましても、町民の皆さまが一日も早く安心して暮らせる町としてよみがえるよう、未来を担う子どもたちが健やかに成長できる町となるよう、町と協力し、なお一層の努力をしたいと思います。

結びに、亡くなられた方々の御霊の永久に安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆さまや被災された皆さまの平安を心から祈念し、追悼の辞といたします。

